

# ものづくりワークショップにおける大学間交流が学生に与える影響

- 「木育キャラバン in おおぶ」での大学間交流活動を通して -

至学館大学健康科学部こども健康・教育学科

西村 志磨

愛知みずほ短期大学現代幼児教育学科

鈴木 安由美

**キーワード：大学間交流、ものづくりワークショップ、協働的学び、保育者養成**

## 1. はじめに

近年の高等教育において、大学間連携は重要な教育・政策的課題として位置づけられている。文部科学省は平成24年(2012)「国公立大学を通じた大学教育再生の戦略的推進」<sup>注1)</sup>として「大学間連携共同教育推進事業」を実施し、国公立の設置形態を超えて、地域や分野に応じた大学間の連携を促進し、教育の質の保証と向上を目指している。これについて、濱名(2023)は、自身の取り組んできた様々な大学間連携・協働の事例を通じて連携・協働の類型化を行い、これからの中小私立大学にとっての大学間連携・協働の可能性について言及している。それによると、中小私立大学が生き残り・発展するためには、地域内に限定されない多様で戦略的な大学連携・協働が不可欠であることを示唆している。また、岩崎(2022)は、大学の連携・統合を「経営・教育・制度」という複数のインセンティブ構造から整理し、合理性だけでは進まない大学再編の本質を明らかにしている。これらの大学間連携研究は、単位互換制度や大学コンソーシアムなどの制度設計、組織間の資源共有や機能分担を主な分析対象としており、大学経営や高等教育政策の観点から多くの知見を挙げている。しかし、こうした研究の多くは大学組織レベルの分析にとどまり、大学間連携が学生の学習経験や意識の変容にどのような影響を与えるのかという点について、十分に検討されているとは言い難い。

そこで、大学間連携を制度や組織の枠組みとして捉えるだけでなく、学生の学習経験に着目した実践的研究が必要であると考えられる。特に、ものづくりワークショップという協働性と創造性を併せ持つ学習活動において、大学間交流が学生の意識や学習態度、他者理解にどのような影響を与えるのかを検討することは、大学間連携の教育的意義を再検討する上で重要である。

本研究は、このような問題意識に基づき、大学間交流ものづくりワークショップ「ことことキャラバン」での活動が学生に与える影響を明らかにすることを目的とする。

## 2. ものづくりワークショップ「ことことキャラバン」について

### (1) 「ことことキャラバン」とは

「ことことキャラバン」とは、筆者らが所属する研究会「ものづくり教育会議」が2023年から実施している子ども向けものづくりワークショップである。「様々な教育機関の学生・生徒同士の交流をねらいとし、子どもを対象としたワークショップを通じて、同じ時間、場所を共有することで子どもの理解を深め、関わり方を学ぶ」ことを目的としている。2023年から現在まで、愛知県内の教育・保育系の大学・短期大学に所属する学生を中心に、県内各地で幼児から小学生を対象にしたものづくりワークショップを年に複数回実施している。

ワークショップの実施方法は、各大学の学生が考えた企画を持ち寄って、一度に数種類のブースを各大学が運営する「持ち寄り型」ケースと、あらかじめ複数の大学の学生同士で事前の打ち合わせを行い、一つの企画を共同で運営する「事前交流型」ケースの2つがある。いずれのケースも、各大学の学生同士が交流する機会を設けているが、後者のケースは時間をかけて複数回の打ち合わせを重ねるため、大学間の学生交流の質がより深くなる傾向にある。よって、本研究では後者のケースである「ことことキャラバン 2024 in 大府」でのワークショップ活動を通して、大学間の交流が学生にもたらす影響について明らかにしていきたい。

### (2) 「木育キャラバン in おおぶ」におけるワークショップ「ことことキャラバン 2024 in 大府」

木育キャラバン<sup>注2)</sup>とは、2010年より林野庁の補助事業としてスタートした『移動型おもちゃ美術館』

である。年間約 40 カ所以上の会場で展開され、木育推進などのテーマを軸に、ワークショップや遊びのステージなど、東京おもちゃ美術館が応援する事業である。大府市では、長野県王滝村・木曾町と「水源の森林の保全・育成に関する連携協定」を 2024 年 7 月に締結し、子どもたちが人と木と森との関わりを学び、木特有の木目・手触り・重さ・音・香りなどを五感で感じながら、創造力と感性を養う「木育」を推進<sup>注3)</sup>しており、その事業の一環として 2024 年 8 月から「木育キャラバン in おおぶ」を開催している。

本事業の連携事業として、子ども向けの木材および自然素材を用いたワークショップの依頼を受け、筆者らが関わってきた「ことことキャラバン」を連携企画として実施することとなった。

実施概要を表 1 に示す。

表 1 の通り、2 日間の活動であったため、1 日目（8/3）に木工ワークショップ「Ki カメラをつくろう！」（図 1）、2 日目（8/4）に紙素材を用いた簡単工作として紙トンボ（図 2）、折り紙うちわ（図 3）を実施した。

表1 「ことことキャラバンin大府」実施概要	
日時	2024年8月3日（土）10：30～16：00 2024年8月4日（日）10：00～15：00
場所	メディアス体育館おおぶ
対象	8月3日（土）小学生（子ども会会員）約30名 8月4日（日）幼児～小学生 約70名 （幼児は保護者同伴）
実践内容	8月3日（土）子ども会会員限定企画 「Kiカメラをつくろう！」 木のパーツをのこぎりで切ったり、ドリルで穴を開けたりして仕掛けのある木工カメラを作る。 （指導者：S大学5名、A大学2名、教員2名、市職員1名）
	8月4日（日）自由参加企画 「簡単工作」 紙とストローでつくる竹トンボや、色紙の帯を織ることによってできた模様を生かしたうちわづくり。 （指導者：S大学5名、A大学2名、教員1名、市職員1名）



図1 Ki カメラ

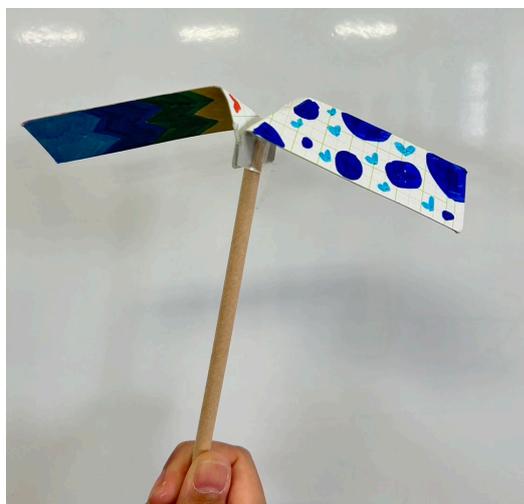


図2 紙トンボ



図3 折り紙うちわ

前述の通り、ことことキャラバンは大学間での学生交流が目的であるため、当日参加可能である 2 大学の学生が、互いに企画内容を協議し、その内容を実践、検討する形でミーティングを行った。

ミーティングの概要について、表 2 に示した。

表2の通り、ワークショップまでに3回の大学間交流の機会を設け、ワークショップ内容についての検討を行った。

本活動では、ミーティングから当日の運営まで、複数の学生が関わったが、全ての活動に参加した4名（S大学2名、A大学2名）の学生へのアンケート調査およびインタビュー調査を通して、大学間の交流が学生にもたらす影響について明らかにする。

日時	第1回 2024年5月22日（水）13：00～14：00 第2回 2024年7月10日（水）13：30～14：30 第3回 2024年7月24日（水）13：00～14：30
場所	第1回 A大学 保育演習室2 第2回 Zoomによるオンライン会議 第3回 S大学 工作実習室
内容	第1回 自己紹介、ワークショップ概要の説明、内容の決定 （参加者：S大学2名、A大学7名、教員2名） 第2回 紙工作(8/4)の実施内容の説明、制作実践 （参加者：S大学2名、A大学7名、教員2名） 第3回 木工作品(8/3)の実施内容の説明、制作実践 （参加者：S大学2名、A大学2名、教員1名）

### 3. 大学間交流を通しての学生の学び

#### (1) 調査方法

2025年3月に、表2に示した全3回のミーティングおよび表1の2日間のワークショップ全ての活動に参加した4名（S大学2名、A大学2名）の学生にアンケート調査を行い、その内容を基にしたインタビュー調査を実施した。

なお、本調査は至学館大学「ヒトを対象とする研究審査」（受付番号295）の承認を受けて実施し、申請内容に基づき、研究責任者がアンケート用紙（資料）の条文中に記載されている研究の目的等について、口頭により具体的に説明をおこない、学生の同意を得た上で実施した。また同時に、活動の様子に関する写真等の掲載においても学生に承諾を得た。

アンケート及びインタビュー調査の結果を表3に示した。

#### (2) 事前活動での学び

##### ① 第1回ミーティング：対面（自己紹介、ワークショップ概要の説明、内容の決定）

表3の質問項目1-①（A大学での制作物の構想に関するミーティング）についての学生の学びとして次の点が挙げられた。

まず、「いつも幼児向けの製作を考えることが多いので、小学生の子どもが楽しむことができるもの考えることが難しかった。」や「子どもが簡単に作ることができる工程を考えるのにとまどった。」という意見から、日常的に関わることが少ない対象年齢に合わせた内容設定の難しさや、子どもの発達に合わせた工程を検討する難しさを感じていることが分かった。

「参考書などを利用しながら、互いにアイデアを共有できた。」「様々な工作のアイデアを共有できて、子どもの楽しいに寄り添える教材を考えることができた。」からは、資料や話し合いを通じたアイデア共有の効果や子どもの「楽しい」に寄り添う教材づくりへの意識を確認することができた。

さらに、「Ki カメラのことで木工専門の先生に相談出来てよかった。」「仕掛けのことや接着のことで困っていたので、その時に相談出来て、（考えていたことが）難しすぎて無理であることが分かったので、納得して取り組めた。」からは、教員（A大学）が木工作家であったため、学生C（S大学）は専門家に相談出来ることの良さを感じていたようである。

また、「様々な案が出た中で、準備物、当日の運営の事を踏まえながら、何をしようか、よく考えることができた。」からは、準備・運営を見据えた計画の必要性を感じていることを確認することができた。

以上の点から、第1回のミーティングを通して、学生は小学生向けの内容設定や工程づくりの難しさを感じる一方で、意見交換や専門家への相談を通じて、準備や運営を見据えた、子どもの楽しさに寄り添う教材づくりの大切さを学んだことを理解できた。

表3 アンケート調査及びインタビュー調査結果

アンケート調査		アンケートに対するインタビュー調査
<b>1. 事前活動での学び：ワークショップを行う前の事前準備で感じたことを記入してください</b>		
<b>① 対面…制作物の構想（於・A大学）</b>		
A	いつも幼児向けの製作を考えることが多いので、小学生の子どもが楽しむことができるものを考えることが難しかった	
B	子どもが簡単に作ることができる工程を考えるのととどつた。	
C	参考書などを利用して、互いにアイデアを共有できた。 Kiカメラのことで木工専門の先生に相談出来てよかった。	<b>Q 具体的にどのようなことですか？</b> 仕掛けのことや接着のことで困っていたので、その時に相談出来て、（考えていたことが）難しすぎて無理であることが分かったので、納得して取り組めた。
D	様々な案が出た中で、準備物、当日の運営の事を踏まえながら、何をしようか、よく考えることができた。	
D	様々な工作のアイデアを共有できて、子どもの楽しみに寄り添える教材を考えることができた。	
<b>② オンライン（簡単工作に関する打ち合わせ）</b>		
A	簡単工作について話し合うことができ、その時に作り方を学ぶことができた。	
B	オンライン越しに一度作ってみて、作ってみた感想や説明の仕方をまなぶことができ、当日に生かすことができた。	画面越しに細部まで見ることができたため、対面と大きな差なく伝えることができたと思う。
C	お互いに役割分担をし、作ったものを分かりやすく説明できるように頑張った。	学生同士でオンラインで説明しあうという機会がないため、良い経験になった。
D	オンラインにすることで、お互いに時間を合わせやすいというメリットがあった。	
D	お互いの工作の作り方を説明するのが難しかった。簡単に繋がるから交流しやすい。	「ここを…」と言っても分からないため、画面越しに言葉で伝えることの難しさを感じた。お互いの大学の先生が、言いたいことを訳して（言葉にして）伝えてくれた。
<b>③ 対面…制作物のサンプルづくり（於・S大学）</b>		
A	なかなか、他の大学に行くことが無かったので新鮮だったし、実際に作ってみて、個々はこうしたほうが良いや、のこぎりの使い方も思い出すことができ、スムーズに当日子どもに教えることができた。	<b>Q 他大学へ行き、事前に何度か打ち合わせを行なったことによるメリットはありますか？</b> 事前に自分でつくりたいと説明できないから、事前につけておくことで子どもたちに伝えやすかった
B	実際に会って他校の方とコミュニケーションをすることができたのでよかった。	道具の使い方も、注意することなども交えながら教えてもらったのでよかった。（学生同士だと）教員に教えてもらうよりも、話しやすい感じがした。
C	事前に一度サンプルを作ったことで、当日の流れや気を付けることなど話し合うことができた。	ワークショップのことだけでなく、今後の進路や就職についても話すことができて良かった。同じ教育・保育系の学科なので情報共有することができた。
D	伝えなければならないこと（注意したほうが良いことなど）を再確認できた。	お互いを知っている安心感があった。ワークショップ当日に会って、一緒に活動することもあるが、いきなりだと話さずらい面もある。お互い自分たちのワークショップのペースを中心に実践するため、なかなか交流できない。
<b>2. 活動当日（8月3・4日）の学び：ワークショップを実践して感じたことを記入してください</b>		
<b>① Kiカメラ（8月3日）</b>		
A	小学生対象だったので、そこまで手助けをしなくても、子どもたち自身で楽しんでやってみようことができた。	<b>8/3 当日の活動について、具体的に教えてください。</b> 普段は幼児しか関わらないため、小学生がどの程度出来るのかが分からず、どこまで手を出してよいか戸惑った。
B	子ども何人かに（大学生）1人だったので、大変なところもあったが、保護者の方もいたので、手を借りながら行うことができた。	小学4年生以上の子どもが多かったため、のこぎりを使ったことがある子どももいた。
C	色々な歳（年齢）の人（子ども）が来て、年齢によってどこまで手助けをするべきなのか、どのような説明をするかわかりやすいのか、考えながらできた。 のこぎりや機械（クリックドリル）を使うので、注意し見守ることをした。	安全性に関しては事前にお互いが確認していたため、スムーズに活動できた。
D	子ども二人につき一人（の大学生が）つくことができたので、安全面に充分配慮することができた。ドリルやのこぎりなど慣れたまま子どもが怪我をする危険性があったため、すぐ片付けることを決めておいた。	事前に一言説明を行うことで、子どもたち自身も共通の意識をもって活動に取り組むことができた。
D	たくさん人がいることで、子ども一人に対して付ける学生が多く、一人一人に合った支援ができた。こどもの作る姿、取り組み姿、出来た時の喜び姿をみれて嬉しかった。こどもの安全性を考慮して取り組めるように、常に気を付けて活動に取り組めた。	・保護者同伴で活動している子は、保護者がなんでもやってくれていた。あまり関わりすぎるとは子どもの経験や創造性にとって望ましくないと感じた。 ・子どもの要望に答えるため、試行錯誤して細かな作業を行うことで自分自身の技能を高めることができた。
<b>② 簡単工作（8月4日） 紙トンボ・折り紙うちわ</b>		
A	テープをはるところが難しかったが、子どもが好きなようにつくることができたと思う。	<b>8/4 当日の活動について、具体的に教えてください。</b> 切れ目なく子どもたちが参加していたため、学生一人1テーブル（子ども4人程度）の担当をして忙しかった。
B	最後のテープをはるとことが難しかったので、小さい子は手伝った。 （制作物が）かわいくて皆喜んでた。	
C	作り方の紙を用意したことで、学生が子どもに付くことが難しくても、保護者の方と進めることが何とか出来ていたためよかった。紙トンボでは、子どもたちが自分なりに試行錯誤しながら、どうしたら高く飛ばか考えている姿が見られた。うちわではテープでとめることが難しかったが、子どもが自分の手にできるだけ付けられるように補助ができた。	制作途中の段階のサンプルを作っておくと、どのようにカットすればよいか分かったので用意しておけばよかった。
D	子どもの年齢に合わせ、教え方を変えたり、出来るところを楽しみ一緒にやってみたりし、楽しくできた。紙トンボでは、やり方の情報共有が少なくていけない部分があり、飛ばすときの手の向きと、紙トンボの作り方（折り方）が違う時があった。情報共有の大切さがわかった。	幼児が多かった。紙トンボがよく飛ばのが良かった。とばすスペースが限られていたため、もう少し広い場所でできるとよかった。
<b>3. 活動後の学び：活動を終えて、これまで実践してきた他のワークショップとの違いやメリットデメリットなどを記入してください。</b>		
一度に多くの子どもに教えることができる		
A	作るもののイメージの共有をしっかりすることや、作り方を一人一人が十分に理解しておく必要があると思った。	
B	実際に（学生同士が事前に）何度か会うことで、ワークショップまでに交流ができて楽しく行うことができた。	<b>Q 木を使ってもものをつくるのはいつ以来ですか？工具は使ったことはありますか？</b> 中学校の技術科以来。木で棚を作った。小学校でのこぎり、糸鋸を使い、中学校美術では彫刻刀でオルゴールの箱を彫った。
C	他校（他大学）との交流ができた。自分は小学生と触れ合うことができた。木材を使って制作することが無かったのでもいい機会になって楽しかった。	
D	（Kiカメラは）予約制で一緒に行うワークショップだったため進行しやすく、準備も行いやすかった。	
D	メリットは予約制で活動しやすい点、一人一人に合った支援ができた点である。	<b>他大学の学生や教員と交流することで良かった点はありますか？</b>
A		事前に充実した交流・活動を行ない、普段使わない道具を繰り返し使ったことにより、保育現場に出た時に自信をもって道具の指導ができると思う。また、木材を使った活動を保育現場でやってみようと思った。
B		幼児が木を使った活動をするのはあまりないと思うので、今回の経験を通して、保育者としての幅が広がった。幼児の姿しか見ていなかったけれども、小学生の姿を見ることで発達の違いを知ることができた。
C		同じ保育を学ぶ学生として、目指す方向が同じ学生同士だったからこそ、よい活動ができたと思われる。
D		ワークショップだけでなく、実習の話聞くことで、実習にむけての不安がなくなった。他大学の先生と色々な話ができて楽しかった。

※A（A短期大学2年生） B（A短期大学2年生） C（S大学3年生） D（S大学3年生）

※網掛け部分は質問内容を示す

② 第2回ミーティング：オンライン（紙工作(8/4)の実施内容の説明、制作実践)

表3の質問項目1-②（オンラインでのミーティング）についての学生の学びとして次の点が挙げ

られた。まず、「簡単工作について話し合うことができ、その時に作り方を学ぶことができた。」「オンライン越しに一度作ってみて、作ってみた感想や説明の仕方をまなぶことができ、当日に活かすことができた。」という意見からは、ミーティングを通して制作物への内容理解が深まり、実践を通じた学びが当日に活かすことができたことを確認できた（図4）。

「画面越しに細部まで見せることができたため、対面と大きな差なく伝えることができたと思う。」「オンラインにすることで、お互いに時間を合わせやすいというメリットがあった。」という意見からは、オンライン環境が一定の説明性と利便性を有していたことが示された一方で、『『ここを…』と言っても分からないため、画面越しに適切に言葉で伝えることの難しさを感じた。』『お互いの工作の作り方を説明するのが難しかった。』という意見からは、オンライン環境の難しさや言語表現の工夫が求められるという課題も認識されていることが分かった。

また「お互いに役割分担をし、作ったものを分かりやすく説明できるように頑張った。」「学生同士でオンラインで説明しあうという機会がないため、良い経験になった。」からは、役割分担が説明の明確化に寄与し、説明力の向上に対する学習効果が確認できた。

さらに、「お互いの大学の先生が、言いたいことを訳して（言葉にして）伝えてくれた。」という意見、オンライン上のコミュニケーションを円滑にするために、教員によるファシリテーションが重要な役割を果たしていたことを示唆している。



図4 オンラインでの折り紙うちわ制作風景

以上の点から、オンラインでの打ち合わせを通して、学生たちは制作理解や説明力を高めることができた一方で、言葉による伝え方の難しさも実感する機会となり、その過程における教員の支援が、学習の深化に寄与していたと考えられる。

### ③ 第3回ミーティング：対面（木工作品(8/3)の実施内容の説明、制作実践）

表3の質問項目1-③（S大学での制作物のサンプルづくり）についての学生の学びとして次の点が挙げられた。

「事前に自分でつくらないと説明できないから、事前につくっておくことで子どもたちに伝えやすかった」や「事前に一度サンプルを作ったことで、当日の流れや気を付けることなど話し合うことができた。」「伝えなければならないこと（注意したほうが良いことなど）を再確認できた。」等の意見から、実践力や指導力の向上に関する内容が認められた。学生たちは、実際に作る経験を通して、「どこを工夫するとよいか」「どこでつまずきやすいか」を具体的に把握することができたと考えられる。また、「道具の使い方なども、注意することなども交えながら教えてもらったのでよかった。」からは、事前に制作することで、指導者として活動の質を高める経験をしたことが分かる。このように「作った経験をもとに教える」ことは、ものづくりワークショップを行う上で当然のことではあるが、素材経験の少ない学生たちにとっては重要な体験になっていることが分かった。また、これらの「作る」経験を通して、前記した当日の流れや気を付けるポイント（安全・説明・声かけ）を事前に話し合うことができた点は、当日の運営イメージの共有や活動の質の向上を促し、結果として、ワークショップ全体の完成度・安定感を高めることにつながったと考えられる。

次に、「実際に会って他校の方とコミュニケーションをすることができたのでよかった。」や「お互いを知っている安心感があった。」「（学生同士だと）教員に教えてもらうよりも、話しやすい聞きやす

い感じがあった。」という意見から、事前に交流していたことで、ワークショップ当日に初対面で活動する不安が軽減されたことが分かった。前記した、持ち寄り型のワークショップは大学単位のブース対応をするため、大学間での交流が限定的であるが、本活動のような事前交流型のワークショップは学生間の人間関係づくり・心理的安心感という点において有益であることが、今回の結果からも理解できた。

また、「ワークショップのことだけでなく、今後の進路や就職についても話すことができて良かった。同じ教育・保育系の学科なので情報共有することができた。」という意見からは、他大学の学生と関わることで、同じ進路を目指す者同士の情報共有ができ、今後の進路や保育に関する視野が広がり、学びの広がりが見られた。

以上の点から、3回目のミーティングを通して、他大学での事前打ち合わせとサンプル制作は、実践的な指導力の向上を促し、当日の運営の質の向上や大学間の信頼関係づくり、学びの幅の拡大という複数の面で大きなメリットがあったことを理解できた。

### (3) 活動中の学び

#### ① Ki カメラ(8/3)

表3の質問項目2-①Ki カメラ(8/3)ワークショップについての学生の学びとして次の点が挙げられた。なお、本活動は子ども会会員限定の企画であり、午前・午後各90分程度の制作時間であり、午前・午後共に15名程度の小学生が参加した。

「小学生対象だったので、そこまで手助けをしなくても、子どもたち自身で楽しんでやってくることができた。」や「こどもの作る姿、取り組む姿、出来た時の喜ぶ姿をみれて嬉しかった。」という意見からは、子どもが主体的に楽しみながら制作する姿があったことがわかった。それに対して、「普段は幼児しか関わらないため、小学生がどの程度出来るのかが分からず、どこまで手を出してよいのか戸惑った。」「色々な歳(年齢)の人(子ども)が来て、年齢によってどこまで手助けをするべきなのか、どのような説明をするとわかりやすいのか、考えながらできた。」という意見も見られ、年齢に応じた説明や支援の仕方を考えながら関わる経験や関わり方の工夫があったことを理解できた。

また、「のこぎりや機械(クリックドリル)を使うので、注意し見守ることをした。」(図5)「ドリルやのこぎりなど置いたまま子どもが怪我をする危険性があったため、すぐ片付けることを決めておいてよかった。」「安全性に関しては事前にお互いが確認していたため、スムーズに活動できた。」からは、事前活動における学生同士の交流が、ルール確認、円滑な活動運営につながり、木工道具の使用における安全配慮へとつながったことを理解できた。

「子ども二人につき一人(の大学生が)つくことができたので、安全面に充分配慮することができた。」「たくさん人がいることで、子ども一人に対して付ける学生が多く、一人一人に合った支援ができた。」という意見があるのに対し、「子ども何人かに(大学生)1人だったので、大変なところもあったが、保護者の方もいたので、手を借りながら行うことができた。」という意見も見られ、同じ活動でも、活動内容に対する感じ方の違いがあることが分かった。これは、学生自身の経験の違いによるものであると推察されるが、適切な人員配置と支援体制の必要性を示していると考えられる。

「事前に一齐説明を行うことで、子どもたち自身も共通の意識をもって活動に取り組むことができた」、という意見からは、活動前に一齐に説明を行い(図6)、素材や道具の使い方についての情報を共有することで、子どもたちが共通の理解・意識をもって制作に取り組むことを促し、これにより説明



図5 個別にのこぎりの使い方を指導する学生

後の個別対応に集中しやすくなり、活動全体を円滑に進めることにつながったことが分かった。ワークショップの運営方法は、一斉に事前説明を行う場合と、随時個別に説明を行う場合があるが、制作物の内容によって、説明方法を使い分ける必要があることを理解できた。

また、前述した「子どもたちが作る過程を楽しむ姿や完成を喜ぶ姿」を学生自身が間近で見ることにより、活動のやりがいを実感する姿がみられ、「子どもの要望に答えるため、試行錯誤して細かな作業を行うことで自分自身の技能を高めることができた」のように、自分自身の制作技能が高まったと感じる学生もいた。一方で、「保護者同伴で活動している子は、保護者がなんでもやってくれていた。あまり関わりすぎるのは子どもの経験や創造性にとって望ましくないと感じた。」のように保護者が過度に手を出してしまう場面に関わることで、子どもの経験や創造性を大切にす関わり方について考えるきっかけとなった学生も見られた。

以上の点から、Kiカメラのワークショップを通して学生たちは、小学生の主体性を生かした関わりや、木工道具使用における安全管理の必要性、適切な人員配置の在り方、事前説明の効果、子どもの姿から学ぶことの重要性など、実践的な学びを得たことを確認した。

## ② 簡単工作(8/4)

表3の質問項目2-②簡単工作(8/4)ワークショップについての学生の学びとして次の点が挙げられた。なお、簡単工作は表1の通り、紙トンボ(図2)と折り紙うちわ(図3)のいずれか、または両方を制作する活動である。前日(8/3)のKiカメラとは異なり、幼児から小学生を対象とした随時参加型のワークショップである。

折り紙うちわ制作において、「テープをはるところが難しかった」という意見が複数の学生から示された。様々な年齢の子どもが参加するこの活動では、年長児にとっては容易な作業でも、年少児にとっては困難となる作業が存在することが明らかになった。「子どもの年齢に合わせ、教え方を変えたり、出来るところを楽しく一緒にやってみたりし、楽しくできた。」や「(テープを)子どもが自分の手にできるだけ付けられるように補助ができた。」などの意見にあるように、学生は子どもの発達段階に合わせて教え方を変えたり、子どもができる部分を一緒に楽しんだりする柔軟な支援の必要性を学んだことを理解できた。

また、随時参加型のワークショップであったため、各テーブルにそれぞれの工作の制作手順をまとめた用紙を用意したところ(図7)、「作り方の紙を用意したことで、学生が子どもに付くことが難しくても、保護者の方と進めることが何とか出来ていたためよかった」という肯定的な意見が見られた。多数の参加者があり、学生が付き添えない場面ができたとしても、事前準備をすることで活動をスムーズに進められることを学んだといえる。「制作途中の段階のサンプルを作っておくと、どのようにカットすればよいか分かったので用意しておけばよかった。」という意見もあり、作り方の図や作品サンプルのような視覚的な補助教材を工夫し、事前に準備することが活動の質を高めることを学んだといえる。

他にも、「紙トンボでは、やり方の情報共有が少しできていない部分があり、飛ばすときの手の向きと、紙トンボの作り方(折り方)が違う時があった。情報共有の大切さがわかった。」という意見があるように、事前の情報共有の不十分さが活動の円滑化に影響する要因として明らかになった。このこ



図6 全体に道具の使い方を説明する学生



図7 制作手順の用紙を見ながら制作する学生

とから、学生は事前に手順やポイントを共有しておくことの重要性を実感していることが分かった。

さらに、「紙トンボでは、子どもたちが自分なりに試行錯誤しながら、どうしたら高く飛ぶか考えている姿が見られた。」という意見からは、学生はものづくりが子どもたちの思考力や探究心を育てていることを理解した。子どもの発達段階や試行錯誤に応じて臨機応変に動く力や、説明・支援の判断力が養われた。

以上の点から、簡単工作のワークショップを通して学生たちは、年齢に応じた支援の工夫、事前準備と情報共有の重要性、そして子どもの主体的な学びを支える関わりの意義を実践的に学んだといえる。

#### (4) 活動後の学び

表3の質問項目3「これまで実践してきた他のワークショップとの違いやメリットデメリット」や「大学間交流におけるメリット」について学生に確認したところ、次の点が挙げられた。

まず、他のワークショップの違いとして「一度に多くの子どものに教えることができる。」という意見が挙げられているが、学生たちがそれまで行ってきた、随時子どもを受け入れるワークショップは、その都度1~2人の少人数の子どもにその都度制作物の説明をし、個別に作り方を教えていたが、Kiカメラのように活動のポイントや道具の使い方を一斉説明することで、子どもが一斉に活動に取り組むことができることを指している。ワークショップの形態に応じて説明の方法を検討することの必要性や、一斉活動のメリットを知ることができたと考えられる。

また、「予約制で一斉に行うワークショップだったため進行しやすく、準備も行いやすかった。」「メリットは予約制で活動しやすい点。」という意見が挙げられた。Kiカメラのように事前予約制の一斉活動にすることで、材料の準備や活動の時間配分などをあらかじめ予測しやすく、活動全体を見通しながら、子ども一人一人の様子に合わせた支援できること、その良さを感じたものであると言える。

「作るもののイメージの共有をしっかりとすることや、作り方を一人一人が十分に理解しておく必要があると思った。」や「実際に（学生同士が事前に）何度か会うことで、ワークショップまでに交流が楽しく行うことができた。」からは、活動に対するイメージ共有と理解の必要性や、事前打ち合わせの重要性という準備・運営面での気づきが見られた。

さらに、「同じ保育を学ぶ学生として、目指す方向が同じ学生同士だったからこそ、よい活動ができたと思われる。」からは他大学との交流経験が充実していたといえ、「ワークショップだけでなく、実習の話聞くことで、実習にむけての不安がなくなった。他大学の先生と色々な話できて楽しかった。」からは進路・実習に対するプラスの心理的効果を生み出していたことが理解できた。このような捉えは、大学間交流が学生相互の学びの場になったことを示しているといえよう。

そして、学生たちにとって今回の活動は「中学校の技術科の授業以来」である木材・工具への経験であったことがわかり、この点が「新鮮」で「楽しい」経験へとつながったともいえるだろう。「幼児が木を使った活動をすることはあまりないと思うので、今回の経験を通して、保育者としての幅が広がった」「保育現場に出た時に自信をもって道具の指導ができると思う。また、木材を使った活動を保育現場でやってみようと思えた。」からは、保育者として木工活動を保育実践で活用したいという意識を育んだことが分かる。さらに、「幼児の姿しか見ていなかったけれども、小学生の姿を見ることで発達のつながりを知ることができた。」からは幼児・児童の発達のつながりへの理解を深めたことが理解できた。このように、素材や子どもの発達に関する学びもいくつか見られることが分かった。

以上の点から、本活動を通して学生たちは、多人数を対象としたワークショップ運営の特徴、事前準備とイメージ共有の重要性、大学間交流の意義、そして素材体験と発達理解の広がりを感じることが分かった。

## 4. 考察

本研究では、大学間交流を取り入れたものづくりワークショップの実践を通して、全ての活動に参加した4名（S大学4名、A大学2名）の学生の学びを「事前」「活動時」「活動後」という時間的プロセスの中で捉え、その教育的意義を検討した。その結果、各段階の学びが相互に関連しながら、学生の多角的視点の涵養と同僚性を基盤とした専門性形成へとつながっていることが明らかになった。

まず、事前段階の学びでは、一部の学生において小学生を対象とした内容設定や工程づくりの難しさを感じる者が見られた。これは、学生自身の経験が主として幼児に偏っていたことに起因するものであ

るが、幼児期から児童期への発達につながりを学ぶ良い契機となったといえる。一方で、大学間での意見交換や制作物における資料作成、専門家への相談を通して教材内容を検討する過程は、子どもの姿や活動全体の運営を総合的に捉える、多角的視点への涵養を促していたといえる。また、教員や他大学の学生との協働を通して準備を進める経験は、単独で完結する実践ではなく、他者と連携しながらよりよい実践を構築していく姿勢、すなわち同僚性を育む学びであったと考えられる。

活動時の学びにおいては、Ki カメラおよび簡単工作のワークショップを通して、学生は子どもの主体性を尊重した関わりや、安全管理、人員配置、説明方法など、実践に即した判断を求められる場面に数多く直面していたことを確認した。これらの場面では、事前に共有されたルールや役割分担が、円滑な運営や安全配慮につながっており、事前準備と実践が相互に機能していたことが確認できた。また、年齢や発達段階に応じて支援の方法を変える経験を通して、学生は子ども理解を一面的に捉えるのではなく、状況や個に応じて柔軟に捉え直す視点を獲得していたといえよう。このことから、実践を通して知識や経験を再構成していく省察的実践者としての学びが生じていたことが理解できる。

さらに、活動後の振り返りからは、多人数を対象としたワークショップ運営の特徴や、事前準備・イメージ共有の重要性、大学間交流の意義が語られていた。特に、他大学の学生や教員との交流を通して、進路や実習に対する不安が軽減されたという記述は、大学間交流が単なる技術的・方法的学びにとどまらず、心理的側面を含む学びの場として機能していたことを示している。また、木材や工具を扱う素材体験や、小学生の姿に触れる経験を通して、幼児から児童への発達の連続性を理解した点は、学生の専門的視野を広げる重要な学びであったといえる。

以上のことから、本活動は、事前・活動時・活動後というプロセスを通して、学生が他者と協働しながら実践を省察し、自身の視点を相対化・拡張していく学習過程を形成していたことが明らかになった。

## 5. おわりに

本研究を通して、大学間交流を取り入れたものづくりワークショップは、学生の多角的視点を涵養し、同僚性を基盤とした協働的学びを促進する実践として、保育者・教育者の養成において有効な教育的意義を有することが分かった。

今回の実践は限られた学生数および期間での実践であったため、今後は大学間交流ワークショップの継続的・段階的な取り組みを通して、多角的視点や同僚性がどのように深化していくのかを縦断的に検討していきたい。

また、本研究では少人数の学生の自由記述をもとに分析を行ったが、今後は事前・事後の比較や自己評価尺度、観察記録などを組み合わせることで、多角的視点や同僚性の変容をより客観的に捉える取り組みを行っていきたい。

## 注記

- 1) 「大学間連携共同教育推進事業」文部科学省ホームページ  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/renkei/](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/renkei/) (2026年3月5日参照)
- 2) 「木育ラボ」東京おもちゃ美術館ホームページ  
<https://www.mokuikulabo.com/caravan> (最終閲覧日2026年3月3日参照)
- 3) 「木育キャラバン in おおぶ」大府市ホームページ  
<https://www.city.obu.aichi.jp/55th/1035189/1036814.html> (最終閲覧日2026年3月3日参照)

## 参考文献

1. 濱名 篤 (2023) 「新しい時代における大学の連携・協働」『名古屋高等教育研究』第23号、pp43-56
2. 岩崎保道 (2022) 「大学の連携・統合の基礎的考察 —大学の連携・統合のインセンティブ—」『高知大学教育研究論集』第26巻、pp17-29
3. 清水 和久 (2016) 「国際理解教育におけるワークショップの役割」金沢星稜大学人間科学研究第9号第1巻、pp1-15.

(資料)

木育キャラバン in おおぶ

「ことことキャラバン in 大府」ワークショップに関するアンケート

本アンケートは、「ことことキャラバン in 大府」(ものづくりワークショップ)の大学間交流活動が、学生の皆さんにどのような影響を与えたのかを評価し、より望ましい大学間交流ワークショップの在り方を検討するためのものです。

「ことことキャラバン in 大府」での活動を通して、感じたことをそのまま記載して下さい。ここで得られたデータは、本研究以外で使用することはありませんし、個人が特定されることもありません。また、アンケートに回答いただかなくても不利益を被ることはありません。なお、アンケートの回答をもって、調査に同意したものとみなします。

本アンケートの結果は今後のワークショップ活動に生かすため、研究論文で発表する予定です。

<アンケートに関する質問先>

至学館大学 西村志磨

([shima-n@sgk.ac.jp](mailto:shima-n@sgk.ac.jp))

愛知みずほ短期大学 鈴木安由美

([a-suzuki@mizuho-c.ac.jp](mailto:a-suzuki@mizuho-c.ac.jp))

1. 事前活動での学び：ワークショップを行う前の事前準備で感じたことを記入してください
  - ① 対面…制作物の構想
  - ② オンライン (簡単工作に関する打ち合わせ)
  - ③ 対面…制作物のサンプルづくり
2. 活動当日 (8月3.4日) の学び：ワークショップを実践して感じたことを記入してください
  - ① Kiカメラ (8月3日)
  - ② 簡単工作 (8月4日)
3. 活動後の学び：活動を終えて、これまで実践してきた他のワークショップとの違いやメリットデメリットなどを記入してください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。